平成二十二年度　東濃地区大会公演用　瑞浪高校演劇部上演台本

擦り切れた縫い針を高く掲げて

（決定稿）

前川泰信・長谷川正俊　作

キャスト

A　芦屋洋一（あしや）　町工場（鉄工所）の工員
B　手塚由香里　（部長　）　女子高校生　信田森高校家政科　三年
C　（シッキー）　女子高校生　信田森高校家政科　？
D　宇野貴江（きえ）　（貴江）　女子高校生　信田森高校家政科　三年
E　武田はるか　（はーちゃん）女子高校生　信田森高校家政科　二年
F　長谷川水紀　（水紀）　女子高校生　信田森高校家政科　一年
G　操（みさお）清徳（きよのり）　（先生）　先生　信田森高校家政科
H　芦屋香奈　（香奈）　Aの妹　中学三年生
I　芦屋タキ　（ばあちゃん）AとHの祖母
J　上原亜子（あこ）　女子高生　朱雀鬼
K　高見早苗　女子高生　青龍鬼
L　宮西るり子　女子高生　白虎鬼
M　池内美由紀　女子高生　玄武鬼
N　女子高生
O　女子高生
P　女子高生
Q　女子高生
R　女子高生
S　先生
J～Sは、可能な限り、通行人や百鬼夜行たちを兼ねる。

舞台背面は土手のような形に三段くらいのひな壇が横断している。蹴込みはできるだけ床面と変わらない色で作成。ひな壇は高さ1メートルくらい。
上手下手に、３０センチ四角×高さ５０センチ程度の箱がいくつかある。1メートルくらいの高さの教室の机に相当する箱もいくつかある。これを置き換えることで、部室の椅子にしたり、町中の歩道の縁石にしたりして、場面を暗示する。

プロローグ

鉄工所の作業音が鳴る中で緞帳が上がる。溶接の音も聞こえる。暗闇で上手にサス。中にAが、防護用のマスクを手にして、溶接をしている。（できれば火花の散るような照明の効果）。音響で声が聞こえる。

声　「おいっ、こっちの溶接やったの誰だ！」
A　「あ、俺です。」

声　「ばかやろう！　またお前か。何遍言ったら分かるんだ。位置がずれてるだろうが！」
Ａ　「…すみません。」
声　「まったく使えねえなあ。もうやめちまえ！」

Ａ、うなだれる。携帯が鳴る。Ａはポケットから携帯を出して出る。

Ａ　「もしもし、あ、先生。お世話になってます。はい。え？　またですか？　ああ、はい。では、すぐに。」

第一場　信田森高校　家庭倶楽部部室

溶明。Ａは携帯を切り上手に去る。箱を椅子として、Ｂ・Ｃ・Ｅが座っている。ＢとＥは一心に縫い物をしているが、Ｃは漫画を読んでいる。足元には通学カバンがあり、黒いコートがはみ出しているものもある。

Ｅ　「部長、ここからどうやったらいいんですか？」
Ｂ　「ああ、ここはコツがいるんだ。ちょっと貸してみ。」

突然、上手からＦが手に紙を持って駆け込んでくる。

Ｆ　「やたーーーーーー！　やりましたよーっ！」
Ｅ　「どしたの？　水紀。」
Ｆ　「ジャン！（**賞状を見せる**）コンテスト入賞！」
三人「おー。」
Ｅ　「どれ。（**賞状を受け取って**）栄町老人会？」
Ｃ　「町内かよ！」
Ｂ　「あ、水紀、こないだ言ってたやつ？」
Ｆ　「そうです！」
Ｂ　「栄町老人会主催、座布団コンテスト。」
Ｆ　「あ、部長、それは言わないで…。」
Ｅ　「座布団ねー。」
Ｆ　「でもでも、一応入賞は入賞ですよ。（**Ｂに**）ほら～、準・優・勝。」
Ｃ　「なんかもらえんの？」
Ｆ　「…芋。」
Ｃ　「芋かあ。」
Ｆ　「もう！　みんな感動が足りない、感動が！」
Ｃ　「芋にどうやって感動しろって？」
Ｆ　「もっと褒めてって言ってんのよ。だって、準優勝よ、準優勝。」
Ｂ　「優勝は誰よ？」
Ｆ　「池田さんです。」
Ｅ　「池田さんって…。」
Ｃ　「古本屋のばあさん？」

BE「あーっ。」
B「あのばあさん、ものすごく手が震えてない？」
E「そーかー、あのおばあさんの次かー。」
C「これで古本屋も跡継ぎができたか。」
F「なんでよ！」
E「でもよくやったよ。おめでとう。」
F「あざーす！　はるかさん、やっぱやさしーっ。ほら、みんなももっと褒めてくださいよ～。褒めて伸びるタイプなんですから～。」
C「うるさいなー。忙しいのっ。」
F「シッキー、漫画読んでたじゃん。」
C「しっしっ。」
F「あ、でもー、私らみんなもっと褒められてもいいですよね～。」

間。黙って縫い物が続く。気まずいF。

B「…たしかに、私たちのこと、知ってもらえたらいいなとは思うし、褒めてももらいたいよね。」
F「でしょ？　でしょでしょ？」
E「よし、じゃ水紀、褒めてあげよう。よくぞ入賞した！」
F「重ね重ねあざっす。　はるかさんは、ほんっとに思いやりがありますよね。」
E「褒め合いっこ？　どうも。でも、部長の裁縫とリーダーシップは何よりすごいっ。」
B「私まで褒めてくれるんだ。じゃあ…。」

みんな、Cの方を振り向く。Cがワクワクした顔で待ちかまえている。

三人「・・・。」
C「あれ？」

みんな、縫い物を再開。

C「おいっ！」

Gが上手から登場。

G「はい、みなさん、お呼びがかかりました。」
B「分かりました。場所は？」
G「長谷川町（はせがわちょう）あたり。もう少しで特定できそうだって。」
B「じゃ、みんな縫いに行こっか。」
EF「はい。」
B「じゃ、先生、公欠届け頼みます。」
G「ん。とりあえず午前中出しとくから、なんかあったら連絡もらえる？」

B　「はい。」
C　「こないだみたいに、私の分出し忘れないでよっ。」
G　「君はいいだろ。」
C　「差別！」
G　「はいはい。なんか、最近絡むな。」
C　「別に。」

B・C・Fは、上手に去る。サスが中央に絞られる。中にEが残っている。コートを取り上げて考え込んでいる。サスの中にFが入ってくる。

F　「はるかさん、行きますよ～。」
E　「あ、うん。」
F　「どうかしました？」
E　「ううん。…水紀。」
F　「はい？」
E　「・・・ううん。入賞おめでと。」
F　「あ…ありがとうございます…。」

第二場　「神隠し」

中央の照明が消えると同時に、下手にサスが点く。その中で、中３の女の子Hが、下手袖の方を向き、箱の一つに座って一心に縫い物をしている。ややあって、上手にサスが点く。気配を感じてHが振り向くと、姿を隠すようにサスが消える。Hがむき直ると中央にサスが点く。また振り向くと消える。向き直ると、今度はHのサスにくっつくようにしてサスが点く。今度は振り向いても消えない。
「あっ」という驚いた表情のHを見せて、暗転。

第三場　街頭

溶明。街角のSE。会社員風など、昼間に歩いていそうな人々が、舞台前面を左右に行き交う。その間を慌てた感じで、Aが下手から上手に何かを探しながら通り過ぎる。ちょっと通行人にぶつかりそうになったりする。ゆっくりと地明かりが絞られ、中央に大きなサスが当たる。上手から戻ってきたAが、サスのエリアをのぞき込むようにするが、何もないというふうにまた下手に過ぎる。
無人になった舞台上に、上手から黒いフード付きのコートを被った人物Dが駆け込んでくる。懐中から時計のようなものを取り出して何かを確かめる。

D　「ここだ」

ポケットから笛を取り出して、上手下手に響くように吹き鳴らす。それに呼応して、上手下手から同じ格好をした人物B・C・E・Fがやってくる。中央に大きなサス。

B　「貴江、見つかった？」
D　「あ、ここ。」

以降、五人は、舞台中央の、一八〇センチくらいの見えない柱を見上げる感じで話す。「三人」と示した場合は、ＤＥＦを指す。

B　「たしか？」
D　「これ見て。」
C　「あ、マニキュアきれい！」
D　「何それ？」
C　「なんかさっき、褒め合おうってことになって。」
D　「式盤（ちょくばん）を見ろ。」
B　「綻（ほころ）びは？」
D　「かなり大きいね」
B　「よし、急いで縫っちゃうか。」
三人「はい。」
B　「針。」

三人、それぞれにポケットから針を出す。

B　「糸繰（いとく）り。」
E　「はい。シッキー。」

C、うなづく。E、何らかのポーズをつけて、Cに意図を伝達する。それを受け、C、空中の何物かから、糸をよりだしていく仕草。順番に、糸の端を四人に渡していく。

B　「糸通し。」

四人、それぞれに糸を通す手慣れた仕草。以下、四人は一針ずつ縫っていく仕草をし、それに合わせてCは糸を繰り出していく仕草。

B　「始めます。」
三人「はい。」
B　「臨（りん）！」
D　「兵（ぴょう）！」
E　「闘（とう）！」
F　「者（しゃ）！」
B　「皆（かい）！」
D　「陳（ちん）！」
E　「列（れつ）！」

F　「在（ざい）！」

四人がCに注目。一呼吸おいて、EとCが一緒に糸を引く。Cは糸を切る仕草。

E・C「前（ぜん）！」

舞台照明明るくなる。

E　「…終わった。」
B　「お疲れ様でした。」
三人　「お疲れ様でしたー。」
B　「じゃ、護符を貼って封印します。」
F　「はい。」

F、護符を入れ物から出す。五人がお疲れを言っているくらいのタイミングで、下手からAが登場してきている。まだ何かを探すような感じで、サスの中をのぞきこんで、

A　「あ。」

びっくりして、五人はAに注目する。Aは、Cの後ろに落ちている何かを拾おうとして、

A　「ごめん、ちょっとどいて。」

五人は、驚いた表情でAを見つめる。その視線の中で、Aは小さなバッグを拾い上げる。

A　「ここに女の子、いなかった？」
C　「（四人に向かい、自分を指さして）女の子。」
A　「は？　いや、中学生。セーラーの。」

五人、激しく動揺する。

E　「あの…」
A　「ん？」
E　「えっと、（Bを振り向いて）どうしましょう、部長。」
A　「何？」
B　「あー、あのさ、ここに私たちは何人いるでしょう？」
A　「…五人。」
B　「指さして数えて。」
A　「（Cを最後にする順番で）1・2・3・4・5。」

五人、再び動揺。Ａから離れた所に寄り集まって、ささやき声で相談を始める。

Ｄ　「由香里、どうすんの？」
Ｂ　「どうするったって、…どうしよう？」
Ｅ　「部長でも分かんないんですか？」
Ｂ　「当たり前でしょ、何、あいつ。」
Ａ　「ちょっ…　何？」
Ｆ　「あ、ごめん、離れててください。」
Ａ　「は？　どういうこと？」

Ａがつかつか近づいてくるので。

Ｆ　「あーーーーっ。もう！」

Ｆが駆け寄って、Ａのおでこに護符を貼る。

Ａ　「ちょっ！　何す…」

Ａ、よけようとした格好のまま、ストップモーション。

Ｂ　「水紀。くだらないことに護符を使わない。」
Ｆ　「でも…はい部長。剥がしますか？」
Ｂ　「…いい。」

Ｅが口の動きで「グッジョブ！」と言う。Ｆ、うれしそうにする。以降、大きな声で相談。

Ｄ　「ほっといても、いんじゃね？」
Ｂ　「いやー、それはまずいんじゃない？」
Ｅ　「シッキーはどう思う？　今までどうだったの？」
Ｃ　「さあ。」
Ｆ　「さあ？　なんか最近投げやりっぽくない？」
Ｃ　「別に。」
Ｂ　「とりあえず、先生に連絡してみる。」
Ｄ　「あいつ、対処できんの？」
Ｅ　「弥生さんに話つないでくれるんじゃないですか？」
Ｆ　「あ、そっか。」

Ｂ、携帯電話をかける。上手の方へ移動するにつれて、声が小さくなる。

Ｂ　「あ、先生ですか。ちょっと相談したいんですけど。あ、縫う方は終わりました。はい、割と大きくて、

はい、でも心配ないと思います。ああ、えっとですねえ、縫い終わったとこに、なんか変な人が来て、いや、変質者じゃなくて、えっと、私たち見て『五人いる』って。はい、そうなんです。いや、偶然なんですけど、はい、はい。分かりました。えっと、午後の授業には間に合うと思うんですけど、あ、そっか、大掃除か。んーまあ、ぎりですかね。じゃ、はい、帰ります。」

というような電話をかけているのを、しばらく見ながら、やがて四人が止まっているAを見ながら相談を始める。

D　「何なの、こいつ？」
E　「女の子とか言ってませんでした？」
D　「これ、何だろな。」

Aの手から、バッグを取って、中を調べようとすると、何か企んでいる笑顔でそおっとCがAに近付き、護符を剥がす。

A　「…んだ、やめてよ…　？」

A、周りに人がいないので、きょろきょろするが、DとEがバッグを見ようとしているのを見つけて、

A　「なっ…　ちょっとそれ！」

Fが慌てて護符をCから取り戻し、再び貼る。Aは駆け寄ろうとする前屈みの格好でストップ。

D　「ばっ、シッキー、いい加減にしろよ。」
E　「あー。びっくりしたー。」

その瞬間に、Bの電話が終わり、中央に帰ってくる。

B　「よし。相談できた。集まって。」
四人「はい。」

Fが慌てて、バッグをAの手に返す。

B　「やっぱり、その人を学校へ…。」

B、Aを目で探し、発見して絶句する。

B　「なんか変わってない？」
F　「ちょっと。」

B、Aの正面のちょっと離れた所に回って、格好を確かめる。すると、Cが駆け寄って、護符を剥がす。Aがいきなり B に向かってダッシュしてくるので、B、びっくりして身構える。

A 「返せよ、なあっ！」
B 「…何？」
A 「いや、バッグを、その子んたちが…。（手の中に見つけて）あれ？」

B、Dを振り向いて睨む。Dは、手で慌てて否定し、Cを指さす。Cはしらばっくれた表情であらぬ方向を見ている。

B 「…あのね。」
A 「ん？」
B 「ちょっと、これから来てくれないかな。」
A 「どこへ？」
B 「私たちの学校。」
A 「学校？」
D 「信田森（しのだもり）高校。」
A 「なんだ、シノコウの生徒。え？　学校は？　なんでそんなの着てんの？」
C 「制服隠れるし…。」
D 「シッキー！」
A 「暑くないの。ま、いいや。で、なんで僕が？」
E 「ちょーっと聞きたいことがあって。」
A 「？」
E 「えっと…。」
B 「行ってから話す。」
A 「何それ。僕、ちょっと用事が…。」
F 「どんな？」
A 「妹をさ、探してて。」
B 「緊急？」
A 「んー、まあ緊急っちゃあ緊急？　でも、もう中三だし、まだ明るいし。」
D 「さぼりか？」
A 「・・・。」
B 「じゃ、できれば、こっち先に来て。あんまり時間取らせないから。放課後だったら、私たちも手伝っていいし。」
A 「いや、でもちょっとなー。」
B 「お願い。」
A 「どーしようかなー。」
F 「もーーーーーっ！」

ばちーんと音高くFが護符をAのおでこに貼り付ける。Aは悩んだポーズのまま固まる。

B　「ちょっと水紀！」
A　「煮え切らない男は大っ嫌いなんです！」
D　「でも、どうすんのよ、これ。」
F　「シッキー、手伝って。」
C　「えー。（Eを振り向く）」
E　「やって。」

FとCは固まったままのAを御輿のように担ぎ上げる。（必要ならEも手伝う。）その形を、見て。

B　「これで運ぶの？」
D　「目立ってしゃーないじゃん。」
F　「急ぎますから。」

FとC、時代劇の籠かきのように「えっほえっほ」と言いながら下手に去る。他もあきれながら続く。
※　もちろん普通に連れて行かれるパターンもあり。
上手から、I登場。

I　「洋一！　洋一！」

舞台中央まで来て。

I　「どこ行っちゃったんだろうねえ。あの子まで。洋一！　香奈！」

I、下手に去る。

第四場　結界の中

照明が変わる。同時にME。ホリの色と共に、今後繰り返される結界の中のシーンは統一。下手奥にサスが点く。そこに妹Hが駆け込んでくる。すると、上手前にサスが点く。Hが振り返り、点いたサスを追いかけて駆けていく。サスから出ると同時に、下手奥のサスは消える。上手前のサスに駆け込んでくると、中央のサスが点く。その繰り返しで、Hがしばらくサスと追いかける姿を見せる。やがてゆっくりとサスが消える。

第五場　信田森高校　家庭倶楽部部室

溶明。上手側で、先生Gが携帯電話をかけている。

G　「うん、だから、そうそう帰りは遅くなるかも。あ、そろそろ僕の親衛隊、来るから。ごめんね、ハニー。うん僕も愛してる。じゃね。うん。」

G、右手をグーにして、差し出すような仕草をしてから携帯を切る。溶明。下手から、B・D・Eが入ってくる。

D　「誰が親衛隊だ？」
G　「御苦労さん。いいじゃん。夫が生徒に人望がないなんて知られたら、もう大変だから。例の人は？」
B　「今、来ます。」

上手から、AをかついだFとCが入ってくる。

G　「わっ！　なんで？」
F　「煮え切らないので拉致してきました。」
G　「あのー、犯罪は勘弁してね。」
D　「そういえば、さっきの電話、最後の意味不明の動作は何？」
G　「妻がね、『お手』って。」
D　「ペットか？」
C　「飼いたくねー…。」
D　「あーあ、弥生（やよい）さんが先生だったらいいのに。」
G　「うちの奥さんは（弥生）は僕だけのもの。」

FがAの護符を剥がす。

A　「…あれ？」
F　「急行で到着しました。」
C　「信田森高校へようこそ。」
A　「（Cに向かって）…ああ、どうも。」
G　「…ほんとだ。」
A　「え？」

急に、上手がざわつき出す。

D　「なんか、騒がしくね？」

女生徒たちが、上手袖から、中をのぞく。

G　「なんだ、君ら？」

女生徒の後ろから、先生Sが入ってくる。

S　「あのー、操先生。」
G　「はい？」
S　「生徒らが、騒いでるんですが…。」

G　「どういうことでしょう？」
S　「なんか、ものすごくリアルな人形が運び込まれたとか。」
G　「え？　あ、あー、その、はい、もう大丈夫なんで。」
S　「大丈夫？」
G　「ちゃんと生き返って、動いているっていうか、いやいや…。」

Gが汗をかきながら、Sに説明している後ろで、女生徒が口々にいろいろ言っている。Cがそのsや女生徒の目の前で手をひらひらさせたり、ちょっかいを出したりするが、皆、全く無反応。それをAが不思議そうに見ている。

G　「とにかく！　心配ないんで。はいはい、君たちも教室に戻って！　今日大掃除だから頼むね。」

みんな、ぞろぞろ上手に帰る。G、それを見送ってから、ゆっくりと振り向いて。

G　「勘弁してよ、君たち。」
F　「すいません。」
G　「ただでさえ、変な目で見られがちなんだからさあ、ここの顧問。」
D　「いつ顧問やってくれって頼んだよ。」
A　「あの…。」
G　「あ、ごめんごめん。なんか強引なことしたみたいで、ほんと申し訳ない。」
A　「僕、一体？」
G　「話を聞かせてもらいたいと思ってね。君がどうやら、あの子（**Cを示して**）のこと…。」
A　「あ、そうだ、あの子、なんか今変じゃなかったですか？」
G　「あ、あー。気が付いた？」
B　「それであなたに来てもらったの。」
A　「それで、って？」
G　「ま、順番に行こう。ここは、信田森高校家庭倶楽部の部室。僕は顧問の操と言います。」
A　「あ、僕、芦屋洋一です。」
D　「で、あんたどういう人？」
A　「え？　どういうって、えっと、高松町（たかまつちょう）の鉄工所で働いてるけど。」
B　「年は？」
A　「十九、って、え？　何これ、尋問？」
B　「あ、ごめん。えっと、私たちは、家庭倶楽部の部員です。部長の手塚由香里。」
D　「宇野貴江。大きい式盤担当。」
A　「ちょくばん？」
D　「結界の様子を測る道具。後で説明する。」
E　「武田はるかです…。」
F　「（**かぶる**）長谷川水紀です。護符担当。」
A　「護符？　あれ？　なんかあんただけ妙に記憶がはっきりしてる感じ？」
F　「まあ、いいから。」

C「シッキーで～す。」
A「シッキーって…。」

みんな、また顔を見合わせる。以下、説明の内容を、Cは脇で身振り手振りで示している。

B「私たちは、家庭倶楽部の活動のほかに、この世と異世界の境目、『結界』って言うんだけど、それが綻びたのを縫う仕事もやってる。」
A「…は？」
D「こっちに私たちの世界があるね、で、こっちにあやかし、…まあ化け物がうようよ詰まってる世界があって、その境目が『結界』。いい？」
E「で、それが時々破れて、ちょろっとあっちがこっちに出てきそうになるわけ。」
F「その綻びが広がって、だあーっとこっちにあふれてこないうちに、見つけて縫うのが私たちの仕事です！　**（Aに至近距離で注目）**」
A「…はあ。」
F「あーーーっ、この人も感動がないっ。」
A「さいなら。」
F「うわ、しかも帰る？」
G「待って待って。」
A「あんたたち、あぶない。」
D「あぶない？」
A「あり得ない話を真顔で話す人が一番危ない。しかも先生まで一緒って、どうよ。」
B「頼むから、話を聞いて。」
A「鉄工所の親父さんも言ってる。手応えのない物は信じるな。」
E「手応え？」
A「『鉄を信じろ。形を決めたらびくともしない。手応えのない物は信じるな。』」
E「鉄を信じろ？」
A「うち、ビルのパーツを作ってんだよ。」
D「ビルって、あのどかーんってでっかい？」
A「ああ。」
B「こんな小さな町で、そんなの作ってんだ。」
F「なんかすごいですねー。」
E「うん。すごい。」
A「・・・初めて言われた…。まー、怒られてばっかいるけど。」
G「芦屋君…だったっけ。あの、さっきからあそこにいる子ね。」
A「ああ、ずうっと踊ってる。」
C「踊ってんじゃねーよっ。説明を補足してたんだろうが。ビジュアル化だよ！」
A「難しい言葉使うなよ。」
C「難しくねーよ！」
A「僕、バカだから！」
G「そこまで。いい？　シッキーをよーく見て気づくことない？」

A、じいっとCを見つめる。CはセクシーポーズをA決めたりしている。

A「恥知らず？」
D「それも当たってるけど。」
C「おいっ。」
G「見た目だよ。」
A「あ、…明るいとこで見ると、…なんか薄い？」
C「いやーっ、見ないで、まだ増毛中ーっ。」
A「今、空気も薄くなった。」
G「それは関係ない。つまり、君には、ちょっと映像が薄い感じはするけど、シッキーが見えるし、話もできると。」
A「はい。」
B「それが普通じゃないのよ。」
A「え？」
D「さっき見たでしょ、ほかの人には薄いとか何とか以前に、全く見えないわけ。」
A「あ、やっぱりそうなんだ。なんで見えないんだ？」
E「問題は、なぜ見えるか、の方なの。」
A「…見えないのが普通ってこと？　この子、何者？」
G「それを説明するには、まずさっきの話を信じてもらう必要がある。」
A「さっきの話？」
B「私たちが、結界の綻びを縫っているってこと。」
D「あんたがさっき覗いた時、あの路地で、私たちはちょうど結界を縫い終わったとこだったの。」
E「あ、なんであんなとこ覗いたの？」
A「そりゃ、香奈を探して…、ああっ！」
F「何？」
A「そうだよ、こんなとこで長話してる場合じゃないんだ。香奈、探さなきゃ！」
F「香奈？」
A「妹だよ。おい、ほんとにあそこにいなかった？」
C「どんな子？」
A「だから、中学三年生。こういう髪型の、このくらいの背。」
C「中学三年生？」
D「家出でもしたの？」
A「いや、学校からいなくなったって、連絡が。」
B「いなくなった？」
A「ま、でも時々あるんだ。興味ないことやらされると、逃げ出して、どっかに隠れて裁縫してる。」
F「裁縫？」
D「どんなわがままなんだ！」
A「いや、そうじゃなくて、つまり、香奈はちょっと学校が苦手で…。」
E「ふーん…。」

F「でもなんで裁縫？」
A「ばあちゃんが教えたら、裁縫だけは気に入って、暇さえあればなんか縫ってるんだ。」
G「でも、なんでそこに妹さんがいたと思うんだい？」
A「ああ、その、シッキー？　の足元に、これが落ちてたんで。」
F「それ何？」
A「香奈の裁縫道具。」
B「…え？　ちょっと待って。」
E「どうしたんですか？」
B「なんかひっかかんない？　なんだろ、貴江。」
D「結界の綻びがあったとこに、女の子がいたかもしんない。しかも裁縫してた。」
F「あり得ないシチュエーションですね。」
B「貴江、式盤、さっきの場所の記録残ってる？」
D「うん、リセットはしてない。」
B「ちょっと見せて。」

みんな、Dの示す式盤に集まってのぞき込む。

A「…なんだ、これ？」
D「式盤。結界の綻びの位置や大きさ、状態なんかが分かる、一種のレーダーみたいなもん。」
A「オカルトごっこも、ここまで来ると手が込んでんなー。」
E「バカにしないで！　いい加減、信じたらどう？」
F「ほんと、なんでこいつにシッキーが見えるんだろ？」

Cがしばらくいろいろちょっかいを出して、Aはうるさがる。その脇で皆が会話。

B「どう？」
D「特に変わったことは…、あ。ちょっと…。」
E「なんですか？」
D「由香里、これどう思う？」
B「あ、なんか微妙に…。これ、綻びが出来た時…。」
D「なんか飲み込まれてるっぽい？」
E「えっ！」
F「どうしたんですか？」
G「まさかと思うけど、この人の妹さん？」
D「可能性はある。」
E「そんなことって！」
B「私も聞いたことない。」
A「ちょっと、何慌ててんの？」
G「芦屋くん。」
A「はい。」

Ｇ　「落ち着いて聞いてくれる？」
Ａ　「何？」
Ｇ　「妹さんは、結界の中に飲み込まれたかもしれない。」
Ａ　「はあ？！」

下手から、女生徒Ｌが駆け込んでくる。

Ｌ　「先生！」
Ｇ　「どうした？　宮西さん。」
Ｌ　「なんか、いっぱい変なことが！」

全員、顔を見合わせる。暗転。

第六場　校内清掃

ＭＥ。上手にサスが点く。中に女生徒Ｋが入ってくる。

Ｋ　「全校の皆さん、今日は大掃除の日です。普段やらない箇所にも気を配って、隅々まできれいにしましょう。」

溶明。

・サスが上手の箱に当たる。そこにやってきた女生徒Ｌがダンボール箱を置く。中から雑巾を出して来た生徒に配っていくと、やがて、箱からどんどん雑巾が吹き出し始める。（３～４人）

・下手にサスが点くと、女生徒Ｋが窓ふきをしようとして、霧吹きをしゅっと吹き付けると、途端に「ぴしっ」とヒビが入るＳＥ。びっくりしていると、「パリン」とガラスが割れるＭＥ。次々に割れるＭＥが続いて、Ｋはおびえる。（１人）

・壇上を上手から下手へ移動しながら、畳を運んでくる一団。さぼっている一人に声をかけて、再び歩き出すと、畳の背後にあやかしＪが立ってにらんでおり、悲鳴をあげて逃げる。同時に、Ｊは壇の下に飛び降りて消える。（６人）

・女生徒が集団でいると、携帯が鳴り出す。電子音で童謡（とおりゃんせ）など。かかってきた本人はきょとんとしているが、周囲は「何その着メロ」と馬鹿にする。まもなくもう一人の携帯が同じ音楽で鳴る。あとは加速度的にどんどん同じ音楽がなり始め、皆、耳を押さえてうずくまる。ストップモーション。（８人）

女生徒たちがストップモーションしている前に、コートを抱えたＡ～Ｆが駆け込んでくる。

Ｇ　「いつのまにこんな？」

A　「これは？」
B　「あちこちの結界が綻びて、向こうの世界の影響が出てる。」
A　「向こうの世界？」
F　「いい加減、これで信じた？」
A　「こんなことって…。」
E　「結界はしょっちゅう綻びるから、ちょっとした影響が出ることは時々あるの。」
A　「時々？」
D　「なんか説明のつかない不思議が起きることってあるでしょ？」
B　「こんなにあからさまにじゃなくても、『あれ？』っていうようなこと。」
A　「僕、霊感ってないから。」
C　「それで、なんであたしが見える？」
F　「今日はなんだか、しっちゃかめっちゃかだーっ。」
E　「水紀、落ち着いて。」
B　「そう。忙しくなるよ。」
A　「もしかして縫うっていうのは…。」
D　「こういう奇妙なものが吹き出して、取り返しのつかないことになる前に、封じ込めてる。」
A　「ちょっ、香奈はその中に入っちまったってこと？」
B　「ごめんなさい。綻びは急いで縫わないといけないから。」
A　「ほっといたら？」
E　「向こうから、邪悪なものがあふれ出してくる。」
B　「百鬼夜行（ひゃっきやこう）。」
A　「百鬼…、夜行。」
B　「化け物の洪水みたいなもの。」
A　「げ。…それをあんたらがずうっと封じてきたってこと？」
B　「そう。」
A　「それって…、みんな知ってる？」
C　「まさか。」
F　「そんなこと言ったら…」

ストップモーションしていた女生徒たち、腹を抱え指さして大笑いする。

N　「何言ってんの、この子たち？」
O　「意味不明なんですけどぉ。」
P　「なんかやばくない？」
Q　「もしかしてカルト宗教か何か？」
R　「しっ、口とか縫われちゃうよ。」

再び大笑いする。

E　「もういいっ！」

間。皆、Eをびっくりして見つめ、気まずい雰囲気。

E　「…ごめんなさい。」
B　「…とにかく始めなきゃ。先生、公欠午後も継続でお願いします。」
G　「どうするの？」
D　「生徒に聞くなよ。」
B　「手分けして、片っ端から縫っていこう。とりあえず仮縫いで数かせいで。」
三人「はい。」
A　「妹は？」
B　「あ。誰か、さっきの路地で様子見てきてもらおうか。」
E　「あたし、行きます。」
D　「はーちゃんいないときつくない？」
E　「シッキーは置いていきます。シッキー、いい？」
C　「あー、まあいいけど。」
E　「ありがと。それじゃ。」

Eは、コートを羽織って、上手に去る。

B　「じゃ、後はみんなで手分けしていこう。先生、弥生さんに電話してアドバイスもらってください。」
G　「分かった。」
B　「（目で『行こうか』と合図）」

Aは、五人がコートを羽織るのを見ながら

A　「弥生さん？」
G　「僕の奥さん。」
B　「私たちの先輩。伝説的に裁縫が上手い人。」
A　「あ、じゃあ。」
F　「高校時代はひたすら結界を縫ってたって。」
A　「へえ…。ねえ、なんでいちいちそれ着んの？」
D　「…ユニフォーム！」
A　「なんか念入りにリボン入れてる気がするけど。」
D　「何見てんの、やらしい！」
B　「行こうか。」
A　「僕は？」
D　「あんたは別に…。」
A　「妹はあの路地にいるんじゃないの？」
D　「路地にいるわけじゃ…」
A　「でも行く。」

G　「いや、君は待ってた方が…」
A　「行く！　これ預かって。」

G、睨まれて泣きそうになりながら、裁縫道具を受け取る。

B　「芦屋くん、はーちゃんが状態を確認して戻ってくるから、私たちと一緒にいて。」
A　「けど。」
B　「お願い。その方が香奈ちゃんを見つける近道だと思うから。」
A　「…分かった。」
B　「じゃ、先生連絡…。」

皆が振り向くと、片隅でGが電話をかけている。

G　「そうなのー。なんだかひどいことになっててさー。顔につばかけられるし。もう僕泣きそう。うんうん。ありがと。そうだよね、ハニー。帰ったら、『いい子いい子』してー。」

C、携帯を取り上げて。

C　「いい子いい子じゃねーっ！」

みんな、あきれる。

D　「結界のことを聞けよ。」
G　「あ、はい。」

G、携帯を受け取って妻と会話を始める。それと同時進行で、

A　「あ、僕もばあちゃんに電話していいかな？」
B　「あ、どうぞ。」
A　**（携帯を操作しながら）**そういえば、ばあちゃんもここの卒業じゃなかったかなあ。」
F　「へえっ、そうなんだ。」
A　「なんか、昔、女学校だった頃？」
C　「女学校…。」
A　「あ、ばあちゃん、僕だけど。あ、ごめん。香奈がなかなか見つからないんだ。うん。ただ、なんか手がかりは見つかりそうだから、心配しないで。ん、いやあ、なんか、どう説明したらいいか…、分かんねーよ、バカだから。急いでるから。じゃ。」
F　「なんか、よけい心配させそうな電話。」
A　「ほっとけ。」
G　「えっ！」

皆振り向く。ゆっくり、六人がいるエリアだけに照明が絞られる。G、携帯を耳から話して。

D　「どうした？」
G　「妻が言うにはね。」
C　「弥生が？」
G　「誰かがわざと結界を破ったんじゃないかって。」
C　「さすが弥生。」
F　「どういうこと？」
C　「人が飲み込まれたり、奇妙なことが連続して起きたりするような綻びは、そうそう自然にはできない。」
F　「そうなんだ。」
B　「…わざと…」

暗転。同時に、次のサスが点く。

第七場　結界の中

ME。下手奥のひな段中央にサス。妹Hが眠っている。そこからややあって中央あたり（できるだけHに近く、しかしサスの重ならない位置）にひな壇上段にサスが点くと、中に朱雀鬼Jが立ってHを見下ろしている。ややあって、上手床面にサスが点く。中にEがいる。

E　「こんなの、聞いてない。」

Jが振り向き、

J　「コン・ナオ・キーペマイ？」

ほぼ同時に、次々と台詞を言いながら、鬼たちが壇上に這い上がってくる。

K　「トンナノ・キーチェライ？」
L　「フォンナロ、ミーネライ？」
M　「ポンナロ、キイレナイ？」

言いながら、まとわりつくようにEの周りに集まって。

四匹「デモ、戻レナイヨ。」

E、苦しそうな表情で正面を向く。サスが全て消える。

第八場　街の中

下手にサス。A・B・C・Fが、あちこちを見回しながら、話しているうちにゆっくりと溶明していく。

B　「だいたい学校の中は縫えたか。」
A　「仮縫いって？」
B　「きちんと繕うには五人いるんだけど、仮縫いなら一人でも出来る。長くは保たないけど。」
F　「あとは外ですね。」
A　「外まで破れてんの？」
F　「なんかあちこち。」

上手から、Dが駆け込んでくる。

D　「由香里！」
B　「何？」
D　「これ、どうなってると思う？」

Dが示す式盤をみんながのぞき込む。

C　「うわあ。」
F　「これ、え？　どういうこと？」
B　「たぶん、同時に何カ所も結界が破られてる。」
D　「同時？　も勘弁して。」

下手から、Eが登場。

E　「式盤見てます？」
B　「うん。同時進行で破られてる。」
E　「破られてる？」
F　「弥生さんが言うには、こんなことは誰かがわざと結界を破らないとできないんじゃないかって。」
E　「・・・。」

C、じっとEを見つめる。

D　「それにしたって派手なことやるなあ。」
F　「破ってるやつが大勢いるってことですか？」
D　「あっ、また！」
B　「はーちゃん、あっちの様子は？」
E　「しっかり縫えてて、異状はありません。」
A　「香奈は？」
E　「外からだと分からない。改めて式盤の細かい数値は記録できたけど。」
A　「えっ、どうしたらいい？」
B　「数値を先生に連絡して、弥生さんにアドバイスをもらう。とりあえず、みんなは全部縫いきってきて。」

三人「はい。」
E「水紀、一緒に来て。」
「はい。」
F「じゃあ、シッキーこっち？」
D「（**Eをちらっと見て**）いいよ。」
C

下手からIが登場。

I「洋一！」
A「あ、ばあちゃん。」
I「なに、あのよく分からない電話は。」
A「ごめん。なんか展開が急で。香奈、帰ってきて…ないよね。」
I「全然。そっちは？」
A「なんか、手がかりがつかめるかもしれない。」
I「手がかり？」
A「高校生が…。」
I「高校生？」
A「この子たち。」
I「…あら、もしかして。」
B「こんにちは。先輩だそうですね。」
I「こんにちは。じゃあ、信田森の？」
B「はい。」
I「どういうことだい？」
A「なんか香奈がどっかに行ってて、えっと、上手く説明できないな、バカだから。」
I「いいかげん、バカって言うの、やめな。」
A「…だって…。」
I「立派なもんだよ。二親（ふたおや）亡くなって、高校進学あきらめて、香奈の面倒も見て。」
A「・・・。」
D「そうなんだ。」
A「お前は十分胸張っていいって。ほら、こないだの同窓会の葉書だって…。」
I「くどいよ、もう！　話すことなんかないって！　仕事も怒られてばっかだし。僕なんか行ったって意味ないよ！」
A『『なんか』はよけいだ。」
I「分かってる！　それより香奈のことだろ！」
B「私たちがなんとか頑張ってみますから。」
A「あなたたちが？　（**Cを見つけて**）あれ？」
I「お久し振り。」
C「あらまあ、おしきさん！」
I「今は『シッキー』だって。」
C「懐かしい。じゃあ、この子たちは…。」
I

C「ほんとに『後輩』なんだよ。タキちゃん。」
A「…おい。ばあちゃん、この子のこと、なんで？」
I「あら、洋一、おしきさんが見えるのかい？」
F「どういうこと？」
C「タキちゃんは、五十年前に結界を縫ってた先輩なんだよ。」
D「だからって、孫もシッキーが見えるもんなの？」
C「タキちゃんは、歴代の式神使いの中でも特別だったから。」
I「いやですよ、そんなこと。」
A「式神使い？」
E「今は私。シッキーは、うちの部に代々仕えてくれる式神なの。」
A「式神って？」
B「大昔、この土地の結界を守ってきたのは、陰陽師だった。」
A「陰陽師？」
D「不思議な力を持ったスーパー占い師ってとこかな。」
C「代々の陰陽師が目に見えない自分の分身としていろいろ用事をさせてきたのが、式神。中でも私は丹誠込めて創られたんで、人格まで持つに至った、まあ、式神の傑作ってわけ。」
E「陰陽師の血筋は滅びてしまったけど、シッキーは代々部員の一人と契約を交わして、結界を縫う糸を作ってくれてる。ほんとは私たち部員にしか見えないはずなんだけど。」
A「・・・。」
I「洋一。どうした？」
A「どうしたじゃねーよ。え？　ばあちゃんが、そんな人だったの？　聞いてねーよっ。」
I「昔は、この仕事やってることは絶対言っちゃいけなかったからねえ。誰にも知られずにやる仕事だった。私もお墓まで持って行くつもりだったんだけど。」
C「時代が違うんだ。」
I「そうねえ。でも、みなさんが出てきているってことは、香奈は…。」
B「…はい。」
I「そう…。なんとかしてやりたいけど、結婚した人間は結界を縫う力がなくなるから。おしきさん、頼める？」
C「どうかな？」
I「(Eに) あなたが今の式神使いさんなのねえ。おしきさんの力はあなたの心次第。お願いね。」
E「…はい。」
I「じゃ、洋一。この子たちをしっかりお手伝いして。うちで待ってるから。」
A「ばあちゃん…。」

I、下手に退場。

A「まだ信じられん…。」
D「でも、これで完全に本当だって分かったんじゃね？　私たちの話。」
A「ああ。」
B「じゃ、急ごう。さっきの分担で動いて。」
三人「はい。」

Ｂは残って携帯をかけ始める。他の四人は上下に散るが、Ｅの去り際に、コートの下から紙が一枚落ちる。Ｅが行ってしまった後で、Ａが気づいて拾う。ゆっくりとＡ・Ｂのいる範囲だけに照明が絞られる。

Ａ　「あの。」
Ｂ　「何？」
Ａ　「落とし物。」
Ｂ　「落とし物？」
Ａ　「ほれ。」
Ｂ　「これ！　どこで？」
Ａ　「今、えっと、こっち行った子。」
Ｂ　「はーちゃん？　水紀？」
Ａ　「が、落としてった。　のか？」
Ｂ　「え。」
Ａ　「例の『護符』ってやつ？　案外うっかりしてんだ。」
Ｂ　「これ…。」
Ａ　「どうかした？」
Ｂ　「・・・！」

Ｂ、何かに気づいたふうで、上手に走って去ってしまう。

Ａ　「おい！」

Ａの照明消えると共に、下手にサス。中に、ＥとＦ。

Ｆ　「はるかさん、なんか大変なことになっちゃいましたねー。」
Ｅ　「…水紀。」
Ｆ　「はい。」
Ｅ　「さっきさあ、『私らみんなもっと褒められてもいい』って言ったよね。」
Ｆ　「あ、部室で？」
Ｅ　「どのくらい褒めてほしい？」
Ｆ　「え？　真顔で聞かれても…。」
Ｅ　「芦屋君のおばあちゃんが言ってたよね、私たちの頃は、誰にも知られずに仕事して、秘密はお墓まで持ってったって。」
Ｆ　「あー、言ってましたねー。」
Ｅ　「どう思う？」
Ｆ　「立派っちゃあ立派なんでしょうけど、お墓までってのはちょーっと辛いかなーと。」
Ｅ　「だよねっ。やっぱそうだよね。」
Ｆ　「はるかさん、どうしたんですか？」
Ｅ　「水紀、話があるの。」

F　「え…。」

第九場　信田森高校　家庭倶楽部部室

E・Fのサス消えると同時に、上手にサス。箱の一つにBが座って、古文書を必死にめくっている。そばにGとAが立っている。

G　「だから、由香里さん、どうしたんだ？　いきなり古文書なんか。」
B　「気になることがあって…。」
G　「気になるって？」
B　「黙っててください。」
G　「！　君まで…。」
A　「なんなんだよ、いきなり…。」
D　「由香里！」

上手袖からDの声がする。皆が振り向くと、DがCの体を支えてひきずってくる。

B　「シッキー！」
G　「どうした？」
D　「なんか、糸繰りしてる間に、シッキーの具合がどんどん悪くなって…。」
B　「大丈夫？」
A　「え、式神って病気になったりすんの？」
C　「洋一…。」
A　「え？　ああ。」
C　「手を出せ。」
A　「は？」
C　「早く！」

Aが手を出すと、Cがその手に手のひらを重ねる。すると、いきなり金属的なSE。照明が変わる。全体が青舞台になる。ひな壇上に、サスが当たり、Hが立っている。BDGはストップモーション。

A　「香奈！」
H　「…おにい、ちゃん？」
A　「香奈！　香奈！　そこ、どこなんだ？」
H　「ここは…ここ？」
A　「何言ってるんだ。香奈！」

ひな壇上、中央にサスが当たる。後ろ向きに誰かが立っている。

A　「誰だ？」

壇上の人物、ゆっくり振り向く。Ｅである。

Ａ　「…おまえ！」

再び金属的なＳＥ。さきほどのサスに戻る。合わせた手をずるっとずらして、Ｃが倒れる。

Ｄ　「シッキー！」

ＢとＤがＣを助け起こす。

Ｂ　「どうしちゃったの？」
Ａ　「香奈が…」
Ｇ　「え？」
Ａ　「香奈がいた。香奈が見えた。」
Ｇ　「まさか。」
Ｄ　「シッキー、あんたが？」
Ｃ　「（うなづく）。」
Ａ　「あれは、結界の中？」
Ｃ　「そう。」
Ｂ　「やっぱり飲み込まれてたんだ。」
Ｄ　「でもどうして香奈ちゃんが？」
Ｇ　「よく分からないけど、…これ見てくれない？」
Ｂ　「なんですか？」

Ｇが預かっていた裁縫道具を開ける。

Ａ　「あ、これ香奈の。」
Ｇ　「これも香奈ちゃんが縫ったんだよね。」
Ａ　「あ、そうです。」
Ｄ　「うわ、かわいい！」
Ｂ　「人形の服？」
Ｄ　「…ちょっと、これ！」
Ｂ　「何、裏地まで付けて？　うわ、こまかっ！」
Ｇ　「はんぱないよね。芦屋君、明らかにおばあちゃんの血を受け継いでるね。」
Ａ　「ええ、まあ。」
Ｇ　「来年、うちの高校受けない？」
Ａ　「んー、高校入れるのかなあ…。」
Ｄ　「大丈夫じゃないの？　偏差値めちゃ低いし。」
Ｇ　「こら。でも是非これはうちに来てほしい才能だよね。」

B　「はい。絶対入ってほしいです。」

この会話の間に、A、Gから裁縫道具を受け取って。

A　「そうなんだ。」
B　「あ。」
D　「何？」
B　「来年シノコウに入るかもしれない、裁縫がすごく上手い子が、綻びのそばで縫い物をしていた。」
C　「たぶん、飲み込まれたのは偶然じゃない。」
A　「偶然じゃない？　どういうこと？　なんで香奈はあんな暗い所に…、あ！」
D　「どうした？」
A　「あの子がいた。香奈のそばに！」
D　「あの子？」
A　「ほら、式神使いの。」
B　「はーちゃんが？」
A　「ああ。」
B　「！　やっぱり。」
G　「やっぱり？」
D　「どういうこと？」
C　「頼むから、みんなではるかのとこへ行ってやって。」
G　「はるかさんのところ？」
D　「どこ？」
C　「今朝の路地。」

第十場　結界の入り口

下手中段と、中央上段にそれぞれサスが点く。中段にF、上段にEがそれぞれにいる。Eは壇上に座っており、Fは立っている。

E　「水紀、無理してない？」
F　「大丈夫です。」
E　「・・・。」
F　「はるかさんこそ、ほんとにいいんですか。」
E　「いい。いまさら、どうしようもないし。」
F　「どうしようもないから、やってるんですか？」
E　「ううん。あくまで私の意志。ほんとに水紀は無理に付き合うことないよ。」
F　「別に無理してません。」
E　「そう。」

下手から、A・B・C・D・Gが走ってやってくる。AがCに肩を貸してひきずっている。

D　「あっ。」
B　「はーちゃん！」
D　「水紀も。」
A　「おい。香奈はどこだ？」
E　「あわてないで。」
F　「シッキー！　どうしたの？」
E　「式神使いがこんなことやってたら、そりゃ弱ってくるよ。」
F　「そうか…。」
E　「シッキーが連れてきたの？」
C　「そう。」
G　「シッキーはね。はるかさんを助けてほしいって。」
E　「！　へええ。でも違いますよ。私がみんなを助けるんです。」
D　「どういうこと？」
B　「結界を破って回ってたのは、はーちゃんなんだよ。」
G　「ええっ！」
D　「まさか。」
E　「へえ。さすが部長。いつ気づきました？」
B　（**護符を示して**）これ。」
A　「あ、それ。」
E　「なんでそこに？」
A　「きみが落としたのを僕が拾った。」
E　「そっか。」
F　「案外抜けてますね。」
D　「ちょっと待ってよ。結界破れた時、はーちゃんも私らと一緒にいたよ。」
B　「はーちゃん。あんた、シッキー以外にも式神が使えるんじゃないの？　しかも一編にたくさん。」
E　「正解。」
G　「うそお！」
A　「式神？」
B　「この護符を小さな鬼に変えて、自分の命令したことをやらせる。」
A　「はあ？」
E　「論より証拠。」

Eが護符を取り出して息を吹きかけると、手から消える。それが地面を走り始め、皆、次々に何かが足元を触っていくのに反応する。最後に、AとG、足をいきなりひっぱられたり、後ろからつきとばされたり、顔をつねられたりして大騒ぎする。小鬼がいたずらしているように見せるパント。

G　「…いる。」
E　「便利だよ。ぺらぺらの紙人形みたいなもんなんだけどね。」
B　「芦屋くんが拾った護符、どっかで見たことあると思って調べたら、式神用のだった。」

A　「え？　あんたら縫う以外にもいろいろできるの？」
D　「まさか。」
B　「ねえ、そんな力、どうやって手に入れたの？」
F　「こいつらです。」

壇の後ろから、またＪ～Ｍが這い出てくる。

B　「ちょっと！　はーちゃん！」
D　「何、こいつら！」
G　「普通に出てきたけど。」
E　「この子たちが力をくれたのよ。」
C　「力？」
E　「式神だけじゃないですよ。結界を隔てて話をしたり、いろいろ。とっくに失われた陰陽師の技ですけどね。昔、陰陽師にこっぴどくやられた分だけ、よく覚えてるわ。」
D　「水紀は？」
F　「はるかさんが誘ってくれました。この素晴らしい力を一緒に使わないかって。」
A　「完全に話に乗れてないんだけど…。」
D　「式神は分かった？」
A　「十分に。」
D　「はーちゃんは、あれを使ってあちこちの結界を破ったのよ。自分は私たちと一緒にいて。」
A　「そういうことか。あれ？　でもなんで？」
D　「何？」
A　「こいつら、なんで自分で破らないんだ。」
C　「あやかしが自分で破れたら結界にならないでしょ。」
A　「ああ…。」
D　「でも、私たちは破ることができる。」
A　「そうなの？」
G　「縫い間違ったら、やり直さなくちゃいけないし。」
B　「はーちゃん。あんたみたいな子が、式神使えるくらいで裏切るはずないよね。水紀まで一緒だし。」
E　「部長、ほんとにすごいですね。部長も、読心術とか使えんじゃないの？」
D　「答えて。」

それまで動かなかった鬼たちが、ゆっくりと壇を降りてくる。

J　「ニンゲ・オモロシロイ。」
K　「食ベラレレナイモノ・エライ」
L　「食ベラレレナイ？」
M　「アイ・チー？」
J　「アイ・キー？」
K　「アイ・ティー」
J　「アイ・ティー、エライ」

L「タブ？」
M「タブチキ？」
K「カブシキ」
J「カブシキ、エライ」
K「食ベラレレルモノ・エラクナイ」
L「食ベラレル？」
M「コメ・サカナ」
J「エラクナイ。」
K「ナイト・死ヌルモノ・エラクナイ」
L「テデ・モノ・ツクル。」
M「キレイニ・スル」
J「エラクナイ。」
A「こいつら、何言ってんだ？」
F「私たちは、その鬼たちと契約を結んだんです。」
G「契約？」
C「はるか…。」
E「こいつらの望む場所の結界をちょっとずつ破ってやる。」
B「そんなことしたら…。」
F「百鬼夜行が起きる。」
D「分かってんなら、なんで？」
E「それを私たちは、結界の中からゆっくりと眺めるのよ。」
A「眺めるって…　はあ？」
B「なんでそんなこと？」
E「聞かなきゃ分からない？　貴江さんとか、いっつも文句言ってるじゃないですか。」
D「…どういうこと？」
E「私たちって何？　こんなに大変な修行して、人の陰で結界の綻び縫って、毎日毎日そんなことの繰り返しで。」
M「フヘイ？」
L「フヘイ。」
B「それが務めでしょ。」
E「それを誰が認めてくれた？　それどころか、こんなコートに制服を隠してなくちゃならない。」
G「それは。」
K「フマン？」
J「フマン。」
E「みんな思ってるでしょ。みーんな、ずーっと思ってるでしょ。『ふざけんなっ』って。」
全「・・・。」
M「イキオドリ？」
L「キチドオリ？」
KJ「イキドオリ。」
F「間違ってるんですよ、こんなの。はるかさんは考えたんです。すごーく考えたんです。結局、世の中

の仕組みがおかしいんだって。それは、ほっといたら、ずーっと変わらない。来年私の後輩が入っても、ずうっとこう。それでいいんですか？」

G「ねえ、なんか変だよ。二人ともいつもの君たちじゃないみたいだ。」

F「黙ってきいてください。私たち、結界を縫ってますよね。」

G「うん。」

F「それってなんのためですか。」

G「そりゃ、綻びからあやかしが出てこないためだけど。」

M「出シテクレ。」

L「出シテクレ。」

E「ってことはさ、私たちが縫わなかったら、世の中が壊れるってことですよね。つまり、私たちは世の中の仕組みを破す力を持ってるってことになりません？」

M「オマエ、チカラ・モッテル。」

L「ダカラ・特等席・ヤル。」

K「オ前ダケ。」

J「オ前ダケ。」

B「あんた、そのために？」

E「そう！　私たちをおかしなとこに押し込めてる仕組みを、私たちが壊すんです。」

B「壊すって、壊れちゃった後、どうするつもり？」

E「忘れたんですか？　縫えばいいじゃん。こいつらが適度に暴れたところで私たちが縫ってみせるのよ。今度はみんながほんとに困っている時に、その目の前で！」

G「それ、やらせって言わない？」

D「泣いた赤鬼？」

G**（すぐ近くに立っているJを見て）**泣きそうにないなー。」

E「貴江さん、分かってないやつらに分からせるんです。自分たちが何の上に生活ができているのか。」

D「そんなことして何になるの？」

E「世界が変わるんです。もう二度と私たちを馬鹿にできない世界になるんです。」

B「はーちゃん、どうしちゃったの…。」

E「部長、こっちに来ませんか。貴江さんは？」

二人、顔を見合わせる。迷っている感じもある。

A「ふざけんな！」

みんな、Aを振り向く。

A「香奈はどうなるんだよ！　なんでお前が破った中に飲み込まれなきゃなんないんだよ！」

E「それは…」

F「香奈さんのことは、計算外だったんです。そいつらが勝手に。」

B「暴走してってこと？」

E「・・・。」

B　「そうなんだね。コントロールできなかったんだね。」
E　「それが何？」
D　「何って何？　じゃあ、百鬼夜行なんか起こしたら、どうしようもなくなるってことじゃん。」
F　「今度はうまくやるんです！」
A　「あのさ、僕新聞も読まないから、よく知らないけどさ、なんか、こんなこと、世界中で、似たような、なんか、起こってんじゃねーの？」
E　「なんかって？」
A　「聞くなよ！　バカなんだから。でもなんか、そういうのって、香奈みたいにいろいろ巻き込まれてんじゃなかったっけ？　いっぱい人が死んでんじゃなかったっけ？　そんで、世の中変わったって感じ、僕、全然しねーけど、どうなの。僕がバカだから分かんないだけ？」

間。

E　「で、どうする？」
B　「はーちゃんこそ、どうするの？」
E　「…交渉決裂。」

ME。いきなり、鬼たちが、ＡＢＤＧを後ろから羽交い締めにして動けなくする。Ｃは力尽きて、倒れている。Ｆが降りてきて、護符を貼っていくと、一人ずつ動けなくなる。Ａにも最後に貼ろうとするのを押しとどめて、

E　「どうする？　お兄さん。こちらから結界に入れます。」
A　「行く。」

鬼たちは、Ｂたちを離して、ＥとＡに続く。Ｆも続こうとするが、

E　「水紀は残ってて。」
F　「え？」
E　「護符だけじゃ心許ないの。見張ってて。中から指示する。」
F　「…分かりました。」
E　「おねがい。」
F　「はるかさん！」
E　「何？」
F　「…私、はるかさんに憧れて、結界縫う仲間に入ったんです。知ってました？」
E　「…そう。」

ME。壇上に、ＡとＥを真ん中にして、左右に二人ずつ鬼が並び、向こうを向いて立つ。ゆっくりとホリを残して暗くなり、シルエットになった人物が、中心から順番に向こう側へ倒れて消えていく。少し長い暗転。

第十一場　結界の中

中央にゆっくりとサスが点く。中にHが寝ている。ゆっくりと周囲が青くなり、AとEが見えてくる。AはHに駆け寄って、起こす。

A「香奈！　香奈！」
H「あ、お兄ちゃん。」
A「よかった。」
H「はるかさんも。」
A「・・・。」
H「すごーく優しいんだよ。」
A「え？」
E「…さあ、みんなでゆっくりショータイムを楽しみますか？」

間。

A「ほんとに起こすの？　百鬼夜行。」
E「起こすっていうか、起きるのよ。」
A「起きる…。」
E「今頃、あの鬼たちが大喜びであやかしに総動員かけてる。」
A「想像したくないな。」
E「あと少しで、そいつらがここを通って、さっきの裂け目から一気に出て行く。そうして、めちゃめちゃに暴れ回る様子を、私たちはここで、嫌と言うほど見せつけられるのよ。」

E、座り込んで顔を覆う。その口が「ばかだ。」と動くのが見える。間。

A「あれ、あの子たちを本気で誘ったの？」
E「・・・。」
A「それとも、止めてほしかった？」
E「止まらないよ、もう絶対！」
A「じゃ、なんで。みんなが拒否すんのを確かめたの？　もしかして護符落としたのもわざと？」
E「…分からない。もう何が何だか。でも。」
A「ん？」
E「よかった。拒否してくれて…。」

間。Hが Aの持っている裁縫道具を引っ張る。Aが渡してやる。

A「…あ、さっき入ってきた裂け目だけどさあ。」
E「縫えないかって？」
A「それ。」
E「無理。裂け目っていうより、もう穴になってるし。」
A「そっかあ…。あ、ほら、さっき言ってたなんかすごい力で…」

E「あいつらがくれた力で、あいつらを止められるって？」
A「…だよなー。」
E「そんな甘くない。」

間。

A「鉄はさ、バーナーで焼き切って溶接すれば、出来たもんの形はもう変わらないわけよ、固いから。」
E「・・・。」
A「でも、あんたらは縫っちゃあ綻び、縫っちゃあ綻び…。」
E「うるさい…。」
A「だから。」
E「は？」
A「すげーなって。」

E、顔を上げる。

A「僕がさあ、鉄工所のこと話した時、きみたち『すごい』って言ってくれたじゃん。でも、きみたちこそすごいことやってるよ。真似できねーよ。僕は知ってるよ。自分が体張って働いてるからさ。ま、知ってたらどうってわけじゃないけど。」

E、笑うような泣くような複雑な表情になる。

A「あー、やっぱおかしい？　おかしいわな。」
E「あんたなんかに…。」
A「ごめん。」
E「あんたなんかに言われて…。」
A「・・・。」
E「水紀がさあ、私に憧れてたんだって。私なんかに。」
A「『なんか』って言ったらだめなんだぞ。」
E「私、世界中に認められないとだめみたいな気がしてたのかなあ。そんなの、誰かたった一人で十分なのに。」
A「そうか。」
E「なんで気が付かなかったんだろ。」
A「バカだからじゃね？」
E「ひど。」
A「僕もバカだから分かるんだよ。」
E「…そっか。そうだね。」
A「否定しろよ。」
E「やだね。」

間。Ａの袖をＨが引っ張る。

Ａ「どうした？」
Ｈ「ここ。」
Ａ「ああ、いつの間に。」
Ｈ「脱いで。」

Ａは作業着の上を脱いで渡す。Ｈはバッグの中から裁縫道具を取りだして縫い始める。

Ｅ「上手だね。」
Ｈ「（微笑む）」
Ａ「シノコウに入らないかって言われたぞ。」
Ｅ「どうする？　外には出してあげられるけど、もうすぐひどいことになるし。ここも時間の問題だし。」
Ａ「でも、ばあちゃん心配してるし。」
Ｅ「そっか。」
Ｈ「縫い物はいいねえ。破れたら繕えるし、穴が開いたらあて布をすればいいし、何度でも縫い直せて。」
Ｅ「…何？」
Ａ「ばあちゃんがいっつも言うんだ、これ。」
Ｅ「あて布…。」
Ａ「どうした？」
Ｅ「水紀、聞こえる？」

すると、上手にサスが当たり、中にＦが入ってくる。

Ｆ「はるかさん？」
Ｅ「時間がないの。よく聞いて。」
Ｆ「はい。」
Ｅ「百鬼夜行を止める。」
Ｆ「…はい！」
Ｅ「みんなの護符を剥がして。それから、由香里さんに『あて布を内側から』って伝えて。」
Ｆ「あて布を内側から。」
Ｅ「由香里さんなら、それで分かる。」
Ｆ「はい、分かりました。」

Ｆのサス消える。

Ａ「なんか思いついた？」
Ｅ「香奈ちゃんのおかげ。」
Ａ「どうする？」
Ｅ「まず、入ったところまで戻る。」
Ａ「分かった。香奈、立って。」

H　「うん。」
A　「よし、じゃ急ごう！」
E　「うん。」
A　「行くぞ。」
E　「！　待って！」
A　「どうした？」
E　「…来た！」

シャリシャリという音が充満する。それと共に、大量のあやかしが上手からも下手からも背面からも登場。
A・H・E、三人の背後に迫る。

E　「香奈ちゃん？」
A　「どうした？」
H　「動けない…。」
A　「そら。（おんぶができるように背中を向ける）」
E　「そのまま駆け抜けるよ。大丈夫？」
A　「労働者をなめんなよ。」
E　「じゃ、行くよ。」
A　「おまえは大丈夫なのか？」
E　「シノコウをなめんなよ。」
A　「…よし、行くか！」

第十二場　結界の入り口

暗転と同時に、下手に大きめのサス。固まっているＢＤＧの護符をＦが剥がしている。

D　「水紀！」
F　「すみませんでした。」
B　「はーちゃんは？」
F　「中です。伝言があります。『あて布を内側から。』」
B　「内側から？　はーちゃんがそう言ってんの？」
F　「はい。」
G　「どういうこと？」
B　「あの子…。」

上手から、Ｅと、ＨをおんぶしたＡが駆けてくる。

E　「水紀！」
F　「はるかさん！」
D　「はーちゃん。」

A「中はすげーことになってる。」
G「すげーこと？」
E「じゃ、部長、始めます。」
B「始めるって、はーちゃん、分かって言ってんの？」
E「もちろん。」
G「何？　どういうこと？」

E、倒れているCに手を差し伸べる。

E「シッキー、ごめんね。ほんとにごめん。」
C「もうぼろぼろだよ。」
A「シッキーどうしたの？」
E「シッキーと私は契約を結んで、一心同体になってる。」
D「はーちゃんの気持ちが、そのままシッキーの元気ってこと？」
E「はい。」
B「はーちゃん、あて布って。」
E「はい。シッキー。頼みがあるの。糸じゃなくて、布が織れる？」
C「はるか次第。」
E「分かった。ありがとう。覚悟はできてるから。」
G「覚悟？」
B「中にいたまま結界を閉じるつもりなのよ。」
G「ちょっと、それだめでしょ！」
A「思いついたって、それかよ。」
B「はーちゃん、方法を考えよ。」
E「中見たら、絶対そんなこと言ってられませんよ。」

ME。シルエットになって、百鬼夜行が舞台後方に浮かび上がる。

E「部長、私…、ごめんなさい。」
B「想像つくよ。はーちゃんは私たちみんなの気持ちを代弁してくれただけ。ってか、私と貴江のために鬼の誘いに乗ったんじゃないの？」
E「ううん。私、何にも見えなくなってました。」
D「しょーがねーなー。今は見えるんでしょ？」
G「何が？」
D「分かんないのか？　私たちの誇りだよ。」
E「私のやることの値打ちは私が知ってればいい。」
D「仲間が知っててくれたら、十分すぎる。」
E「さすが貴江さん。」
D「あ、それなかなか言ってくれなかったよね。」
F「わりと言ってた気がしますけど。」

D　「そうだっけ？」
E　「ごめんなさい。やっぱり、面と向かって言わないとだめですよね。」
G　「でも、はるかさん。中に残るなんて！」
E　「お願いです。私たちの誇りが永久に破れてしまう前に、縫わないと。」
F　「はるかさん！」
E　「水紀ありがとう！　じゃあ、部長、外側お願いします。」
B　「…分かった。」
E　「シッキー、行くよ！」

舞台中央にサスが点く。ＥとＣはその中へ移動。Ｂたちは、下手の大きなサスの中。

E　「あて布。」

Ｃ、小さな平べったいものを、大きく大きく伸ばしている仕草。

C　「よし。」

この間も、あやかしは迫り続ける。Ｅ、布を広げて穴をふさぐ仕草。

E　「あて布、準備できました。」

ＢＤＦも針に糸を通す。

B　「同時に縫います。」
皆　「はい！」
全　「臨（りん）！　兵（ぴょう）！　闘（とう）！　者（しゃ）！　」
E　「ああっ！」
B　「どうした？」
E　「穴が広がって、布がずれる！」

Ｂたち、お互いにうなずき合って、中央のサスの中に飛び込もうとする。Ｇはひたすらおろおろしている。

A　「おいっ、どうする気？」
D　「中からみんなで押さえる。」
A　「って、中に残る気？　あの化け物の巣に？」
B　「私たちの仕事だから。」
A　「…僕も行く。」
F　「なんで？」
A　「嬉しかったから。」
F　「はあ？」

B　「芦屋くん、あなたにはあなたの縫わなきゃならないものがあるでしょ。それを縫って。」
A　「僕の？」
B　「行くよ！」
二人「はいっ。」

四人、中央サスに飛び込む。

E　「えっ！」
B　「手が足りないんでしょ？」
E　「でも…」
D　「時間がない！」
E　「ありがとうございます。」
B　「始めます。」
皆　「はい！」
全　「臨（りん）！　兵（ぴょう）！　闘（とう）！　者（しゃ）！　皆（かい）！　陳（ちん）！　列（れつ）！　在（ざい）！」
E　「香奈ちゃん。」
H　「はるかさん？」
E　「針が出てるのが分かる？」
H　「うん。」
E　「同時に引いて仕上げをするよ。いい？」
H　「はい。」
二人「前（ぜん）！」

一気に暗転。ゆっくりと溶明する。中央でAとHとGがしゃがみこんでいる。H、手に持ったものをAに差し出す。

A　「ん？」
H　「はるかさんの針。」
A　「ああ。　先生。」
G　「はい。」
A　「…いいんですかねえ。」
G　「？」
A　「こんなに普通に朝が来て。」
G　「（溜め息をつき、あらためて空を見上げる）…。」

エピローグ

A、立ち上がって、少し前に出る。Aだけにサス。鉄工所の作業音。できれば溶接の作業をする。（マスクをどうやって手にするかが問題）。

声　「洋一。」
Ａ　「はい。」
声　「ここやったのお前か？」
Ａ　「あ、はい。」
声　「相変わらず下手だなあ。」
Ａ　「…すいません。」
声　「でもまあ、」
Ａ　「？」
声　「ずいぶんマシになったんじゃねえか？」
Ａ　「！」
声　「頑張れよ。」
Ａ　「はい！」

会話の途中から聞こえないレベルでエンディングのＭＥが流れ始めている。Ａ、声が去っていく方向を見てお辞儀する。顔を上げるとゆっくり胸ポケットから針を出して、しばらく眺めてから誇らしげに高く掲げる。それに呼応するように背後のひな壇の上に、ＢＣＤＥＦの五人が浮かび上がる。五人がゆっくりと縫い針を掲げる。やがて、皆がゆっくりと正面上方を向いたまま、微笑みあう。ＭＥが高まる中、幕。

引用・参考
岡野玲子・漫画　夢枕獏・原作　「陰陽師」　白泉社
「ブックスエソテリカ　６　陰陽道の本」　学研
田辺イエロウ　「結界師」　小学館
フィリップ・ジャンティ・カンパニー　公演　「世界の涯て」
浜田廣介「泣いた赤鬼」偕成社